

インフィニット・ダーク・インパクト！

ギアゴットXIII

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界は、女尊男卑の思想で染まっていた。

そんな中、たった一人の男性操縦者である織斑一夏が主役の物語がインフィニット・ストラトスだ。

だが、そんな中に一人のイレギュラーが入り込み、歪んでしまった。その歪んだ世界で戦う織斑一夏の物語。

目次

第0話	1
第1話	4
第2話	7
第3話	11
第4話	14
第5話	17
第6話	20
第7話 悪しき力で正義を掴め	24
コラボ回 次元を越えて	27
コラボ回 次元を越えて 会合する戦士たち	30
コラボ回 世界が違うところも違う	33
コラボ回 次元を超えて ついに会合、白と黒	36
コラボ回 次元を超えて 戦闘！黒と白！！	38
コラボ回 次元を超えて 決着	41
コラボ回 最終 次元を超えて	43

第0話

俺は、織斑一夏。小さい頃に父と母は、不慮の事故で死んでしまつて、今は母方の家に住ませてもらっている。住まわせてもらっているのはいいんだが、一言で言つて地獄だった。

兄には、理不尽な暴力を受け、姉は「秋羅がそんな事するわけがない。」と言ひ、聞く耳をもたない。学校でも、「織斑千冬の弟なのに何故こんな事も出来ない。」と言われ、俺自身を見てくれる人はいなかった。

いや、一人だけいたか。俺が習いに行つてゐる剣道場の師範の娘の篠ノ之束さんが。束さんの妹の箒は、何か問題があれば、すぐに暴力に訴えるという性格で、本当に姉妹なのかと疑うくらいだ。

俺には才能がなかった。だが、一つだけあつた。それは、機械の作成だ。この才能は束さんの折り紙つきで、認めてもらっている。

以前、束さんと一緒に作つた腕時計がある。ほとんど束さんが作つたんだけど。それは俺の宝物だった。でもまさか、この腕時計が俺の人生を変えるなんてこの時は思わなかった。

一夏 「うゝゝん、ここは…。」

俺は確か行きたくもないドイツで行われる、モンドグロッソの大会に連れてこられて、それで…

あつ、俺誘拐されたのか。結論に達するのに時間はかからなかった。

誘拐犯 「おつ、目を覚ましたか。お前は大事な人質だ、結果によつちやあ生かしてやるよ。」

一夏 「そうか、なら俺は殺されるな。」

誘拐犯 「あ？それはどういう事「おい!! 大変だ!!」 どうした?!

誘拐犯 「織斑千冬が決勝に出てやがる!!」

女 「なつ?! ちゃんと連絡がしたんでしょうね?!」

誘拐犯 「ちやんと連絡したさ!!という事は、まさか…!!」
やっぱり、二連覇という荣誉と出来損ないの俺じゃあまあ、選ぶのは簡単だろうな。

女 「じゃあ、こいつもういらないから、始末しといて。」

誘拐犯 「ああ、わかったよ。悪いな、恨むんだったらこの世界とあの家族を恨むんだな。」

そう言い、俺の心臓の位置に銃口を当て、引き金を鳴らした。

この時、一夏の心の中は、憎悪と深い憎しみです満たされていた。わかっていながらも、少しは期待していたがそれも粉々に打ち砕かれた。

しかし、一夏は気づいていなかった。腕時計から赤黒い光が発生しているのを。

そして、引き金が鳴った。しかし、いつまでたっても痛みがないので、目を開けると周りの時間が止まっていた。

一夏 「なんだよ、これ…!!」

その時不意に声が聞こえた。

??? 〈汝ガ我ノマスターノ織斑一夏カ?〉

声のした方に目を向けると、そこにいたのは、全身が鋭角的に尖っており、背中 of 辺りからレーザー兵器のような物がついたドラゴンだった。

一夏 「?!なんで俺の事知ってるんだ?!」

??? 〈当然ダ、我ヲ作ツタノハ籐ノ之束、ソシテオ前ナノダカラナ。〉

一夏 「作った?俺はドラゴンを作った事はないぞ。」

??? 〈ハア、モウ忘タノカ?確カニ作ツタダロ、ソノ腕時計ヲ。〉

はあ?!この腕時計が?!これ普通の腕時計じゃあないのか!?

??? 〈ソレハマタ説明シヨウ。トコロデ、マスターハナニヲシタイ?〉

うん?何をか…、そんなの決まってる。

一夏 「あの家族に、政府に、復讐したいっ!!」

??? 〈ソウカ、ナラバ我ヲ纏エ!!ソシテ、マズ目ノ前ニイル層共ヲ殲滅シヨウ!!ソロソロ時間ガ動イクゾ、ソノ前ニ我ガ名ヲ教エテオコ

ウ、我がガ名ハ鎧獄竜!!世界ヲ変エルモノナリ!!

そして時間が動き始めた。

撃たれる前に一夏は叫んだ。

一夏 「鎧獄竜っ！起動っ!!!」

一秒もかからずに一夏は全身に装甲を纏った。

誘拐犯 「なんだ?!これは?!」

女 「ISは女しか使えないんじゃないの?!」

一夏 「おい……、全員一列に並べ、苦しまずに殺シテヤル。」

・
・
・
・

数時間後、ドイツの部隊が到着したが、そこには誘拐犯達の死体し
かなく、織斑一夏の死体は見つからなかった。

第1話

俺はテロリスト達を殺して廃墟を後にしていた。

一夏 「そういえば、教えてくれるって言ったよな。この腕時計はなんなんだ？」

鎧獄竜 <ソノ腕時計ハ東ガ殆ド作ツタノハ知ツテイルダロウ？実ハソノ時ニ東ガISノコアヲソノ腕時計ニ入レテ作ツタカラダ。>

えっ?!この腕時計、ISのコア入ってるの?!でもなんで東さんはそんな事を...

鎧獄竜 <ソレハ、才前ガコウナル事ヲ知ツテタカラダ。ダカラ我ヲソノ腕時計ニ入レタ。>

一夏 「そうか...、俺東さんに助けられればなしだな。」

鎧獄竜 <ソレヨリ、才前ニ行ク当テガアルノカ？我デモ東ノ居場所ハワカラナイゾ。>

あつ、そうだった。感動している場合じゃない、どうにかしないと。鎧獄竜 <ソレナライイ場所ガアルゾ。匿ってクレルカハ分カラナイガ、ソノ場所ハ亡国企業。>

イガ、ソノ場所ハ亡国企業。>

??? 「たく、一週間も連絡をよこさないって何をやってるのよ。」

彼女は亡国企業の幹部、スコール・ミューゼル。日本支部の一つが音信不通になったため確認に来ていた。

??? 「たく、何をやってるんだか。何で俺たちまで動かなきゃならないんだよ。」

スコール 「もう、オータムそんな事言わないの。」

そう言っているうちに目的地に着いた。

そして建物の中に入っていった。

だが、スコールは少し不思議に思った。静かすぎると、前来た時は、ここまで静かではなかったのと思い、講堂に着いた。

ドアを開けると、

スコール 「?!」

オータム 「なんだよ…！これっ?!」

そこにあつたのは、大量の死体だった。殺されて数日たっているのか、臭いがすごかった。死体の山の上にナニカがいた。

??? 『アア、ヤット来テクレタカ。待ッテイタヨ。』

オータム 「男だど?!それよりも！これ、全部お前がやったのか?!」

スコール 「落ち着いて、オータム。で、あなたは何者なの?」

??? 『何者カ…、名乗ルナラ、”カイザー”ソウ呼ンデクレ。』

スコール 「ところで、カイザー何故こんな事をしたの?」

カイザー 『教エテヤロウ。俺ノ目的ハ二ツアル。一ツハオ前達ヲ

呼ブコト、ソシテモウ一ツハオ前達ノ仲間ニナル事ダ。』

スコール 「私達には何のメリットがあるの?」

カイザー 『メリットハ俺トイウ戦略ヲ使エルトイウ事カナ。』

スコール 「ふうーん、確かに良いメリットね。いいわ、あなた「おい、ちよつと待ってくれ。」うん?オータム、どうしたの。」

オータム 「こんな実力も分からない奴を仲間にする訳にはいかないだろう?という訳でカイザーとかいったか、俺と戦え。勝ったら仲間と認めてやるよ。」

カイザー 『本当カ?ジャア今カラ始メルゾ!!』

と言ひ、俺はオータムに斬りかかった。

オータム 「危ねえ!!テメエいきなり来るなよ!!」

カイザー 『戦場ハイツデモ臨戦態勢ジャアナイト生きテイラレナイノデハナイノカ?ヨク生きテイラレタナ。』

オータム 「うるせえ!!これでも喰らえ!!」

オータムがアラクネのクロローで攻撃してきたが、

カイザー 『ソノ程度、ダーク・クロロー。』

自分もクロローを展開し、相手の攻撃を防いだ。

オータム 「なっ?!くそお!まだ『イヤ、終ワリダ、リミッター解除。』?!」

そう言った瞬間、カイザーの威圧感が増した。

そして、

カイザー 『消エロ、サイバー ダーク インパクト!!』
その瞬間、膨大なエネルギーがオータムを襲った。

・
・
・

オータム 「うーん、ハッ?!勝負は?!」

スコール 「あなたが負けたのよ、という訳でいいわよね。」

オータム 「わかったよ、認める。よろしくな、カイザー。」

カイザー 『ヨロシク頼ム。』

スコール 「ねえ、仲間になっただんだから貴方の正体見せてくれないかしら。」

カイザー 『ソウカ…、仕方ナイ。』

そう言っただけ俺は装甲を解除した。

オータム 「なっ?!お前は?!」

スコール 「オータム、彼が何者か知ってるの?」

オータム 「知ってるも何も!!アイツは「そこからは俺に言わしてくれ。」…わかったよ。」

一夏 「では、俺はカイザー改め織斑一夏。社会から出来損ないと
言われたあの織斑一夏だよ。」

こうして俺は居場所を手に入れた。

スコール 「無人機が破壊されたわ。貴方の出番よ。」

一夏 「了解、じゃあ切るぜ。」

と言いつ、一夏は通信を切った。

一夏 「そろそろスイッチ入れるか。」

・

・

・

アリーナ内

秋羅 「たく、危なかったぜ。もう少しで負けるところだったぜ。」

鈴 「そんな事言ってるけど、アンタ逃げてばっかだったじゃない。

神童が聞いて呆れるわ。」

秋羅 「あんな奴、万全な状態だったら簡単に倒せるさ！」

千冬 「秋羅、鈴よくやった。早く戻って来い。」

鈴 「はいはい、そうね。早く戻りましょう。」

と言いつ、ピットに戻ろうとした時、

ドカアアアアアアアアアアアン!!

鈴&秋 『?!』

千冬 「どうした?! 一体何があった!!」

秋羅 「向こうで爆発が!! 無人機はもう全部倒したはずなのに!!」

???' 『敵が無人機だけとは限らないだろう?』

アリーナの中心にいつからいたのか、フードを被った女性がいた。

鈴 「?! アンタ一体何者?!」

???' ↓カイザー 『私はカイザー、このIS学園に無人機を送り込ん

だ者です。』

秋羅 「なんでこんな事をした!! 答えろ!!」

カイザー 『簡単だ、無人機の性能を確かめるためだ。』

秋羅 「!! お前えええ!!」

鈴 「ちよつと!! 考えて行動しなさいよ!!」

鈴が叫んだが、秋羅は聞く耳を持たずに斬りかかってきたが、

カイザー 『無駄だ、クロー展開。』

カイザーが展開した武器で止められてしまった。

秋羅 「なっ?!」

カイザー 『これほどの事で驚くな。』

と言いつつ、秋にはを蹴り飛ばした。

カイザー 『話にならん、おい、そこのお前。』

鈴 「えっ?!私?!」

カイザー 『そうだ、相手してやるよ、かかって来い。』

鈴 「言つたわね!後悔しない事よ!!」

鈴がこつちに向かつてきた。

アイツと同じか、と思いつつ先程と同じように対処しようとしたが、突然何かに吹き飛ばされた。

カイザー 『グウ!!なんだ今のは?』(鎧獄竜、解析しろ。)

鎧獄竜 <モウ、終ワツテル。アレハ空気ダ。>

カイザー (成る程、それでぶつとばされたのか。。。あの武装、いいな。)

鎧獄竜 <アレヲ使ウノカ?>

カイザー (勿論だ、あんなの逃してたまるか。)

鈴 「戦闘中に考え事つて随分と余裕ね!!」

カイザー 『キール展開!!』

俺は武装を取り替えた。

鈴 「えっ?!姿が変わった?!」

カイザー 『隙ができたな!!貴様の武装少し借りるぞ!!』

俺の背中からコードが伸びて、鈴の機体に接続された。

鈴 「ちよつと?!何よ、これ!!はなしなさいよ!!」

鈴が暴れるが、コードは切れなかった。

すると、突然カイザーの機体が光り出した。

カイザー 『もう終わったか。お前はもう用済みだ!!』

と言いつつ、鈴を地面にはたきつけ、カイザーは 空中に浮いていた。

鈴 「イテテ、アンタねえ!えっ。。。嘘。。。」

秋羅 「なっ。。。!!ウソだろ。。。」

鈴と秋羅は驚いていた。何故なら、鈴の龍砲と全く同じものがカイ

ザーの肩部のところに浮いていたのだから。
カイザー 『さあ、戦いはこれからだ。』

第3話

千冬SIDE

千冬 「なんだ！あの機体は?!」

千冬は管理室で驚いていた。

千冬 「教員部隊を呼んで奴を拘束しろっ!! 奴は先程のゴーレムとは違う!! 急げっ!!」

山田 「は、はい!! わかりました!!」

千冬SIDE END

アリーナSIDE

鈴 「アンタ!! なんで龍砲持ってるのよ!! さっきまでなかったでしょ!!」

カイザー 『ハア、だから言っただろう? 借りるぞってな。』

話していると、教員部隊が出てきた。

カイザー (いくらなんでも教員部隊が出てくるの遅くないか?)

教員 「カイザー! お前はもう包囲されている!!」

教員 「ISを解除して手を上げなさい!!」

カイザー 『ヘエ、じゃあ、力尽くでやってみなよ。』

そう挑発してみたら、

教員 「なっ?! 言ったわね!! みんな! かかりなさい!!」

カイザー 『ラファールに打鉄か...、じゃあお前らはそこで見てな。ちよつと本気出してやるから。』

俺が一番近きにいたラファールに高速で近づき、地面にはたきつけた。そして、龍砲でトドメを刺した。

教員達 『?!』

カイザー 『教員部隊って言っても弱いんだな。次は誰だ?』

教員 「くそっ! 二人で行くわよ!!」

二人できたが、俺は難なくかわし、トドメを刺していった。

そして、気づけば一人だけになっていた。

教員 「あっ...、あ... あ。」

カイザー 『じゃあな、。』

俺は龍砲の最大出力を打った。

カイザー 『これで終わりか、案外呆気なかったな。さて、次はお前達といきたいところだが、時間だ、じゃあな。』

といい、カイザーは消えていった。

・

・

・

・

簪SIDE

簪は廊下を歩いていた。

簪 「早く私の専用機を開発しないと。避難している場合じゃあない。」

廊下の角を曲がろうとした時、

『おい』

どこからか声が聞こえたが、後ろにも前にも誰もいなかった。

『この状態じゃあ見えないか、ちよつと待ってろ。これで見えるだろ。』

そこにいたのは、フードを被った女性だった。

簪 「貴女は誰?」

簪は警戒しながら聞いてきた。

カイザー 『私はカイザー、この学園を襲撃した者だ。』

簪 「?!...で、何の用?私を誘拐するつもり?」

カイザー 『そんな事はない。私はおまえと話をしたいと思っただけだ。』

簪 「話って何?」

カイザー 『物分かりがいいな、じゃあ話といこう。まず、お前の専用機の開発は永久に凍結したらしいな。』

簪 「貴女!何でそれを?!」

カイザー 『落ち着け、お前は一人で専用機を作っているようだがそんなんじゃ永遠に完成しないぞ。』

簪 「じゃあ、どうすればいいの?!」

カイザー 『そんなの簡単だ。これをやるよ。』
と言い、簪に何かを投げ渡した。

簪 「これは？」

それは、歯車がいっぱい付いた時計だった。

カイザー 『それを使うかはお前次第だ、じゃあな。』

簪 「待ってっ!!」

簪は彼女を呼び止めようとしたが、もう彼女はいなかった。

そして彼女の持っている時計は鈍い光りを放っていた。

第4話

簪SIDE

私はカイザーに時計を渡されてから、おかしい夢を見るようになった。その内容は私がIS学園を破壊するというものだった。

でも、変な感じだった。何故ならIS学園を破壊している私とそれを見ている私がいるからだ。

突然、私が話しかけてきた。

簪? 「君は本当は恨んでいるんでしょう? 自分の姉と織斑千冬とその弟を、復讐しないの?」

簪 「確かに恨んでいるわ。でも、その為に必要な力がないじゃないから。いい!!」

簪? 「なら、私を使えばいい。必要なものは私が用意してあげるから。」

簪 「本当に?!」

簪? 「本当よ、だからその時まで待っていなさい。」

と言い、私の形をした何かが私に手を向けてきた。

その瞬間、私の意識は闇に落ちていった。

・
・
・
・

簪 「!!」

私は起き上がり、周りを見た。いつも通りの自分の部屋だった。

私はカイザーからもらった時計を見た。

簪 「?こんな色だったっけ? まあ、いいか。」

その時計は紫と緑の毒々しい色になっていた。

簪SIDE END

一夏SIDE

俺はあれから任務もなく、自室でのんびりしていた。

一夏 「あゝ、暇だ。なんかする事ないかな。そろそろ連絡が来

るはずなんだけどなあ。」

そんな事を言っていると、

鎧獄竜 〈オイ、紫毒カラ連絡ガキテイルゾ。〉

一夏 「おつ、やっと来たか。えーつと何々？ IS学園に入学できるかどうかか…。」

鎧獄竜 〈難シイノデハナイカ、マア、何処カノ企業ニ属シテイレバ別ダガナ。〉

一夏 「おつ、いい事思いついた。ちよつとスクール さんの所に行ってくるか。」

と言い、俺は自室を出て行った。

・

・

・

一夏 「えーつと、スクール さんは…、いた！ スクールさんちよつといいですか？」

スクール 「うん？ どうしたの、一夏君。もしかして、IS学園に入学したいの？」

一夏 「えつ、なんでわかったんですか？」

スクール 「だって、貴方すぐに顔にでるんだもの。」
えつ、まじ？ 俺ってそんなに顔に出てる？

鎧獄竜 〈マア、我カラモ言ワセテモラウガ、カナリ出テルゾ。〉

はあ、相棒にも言われるなんて…。

一夏 「はい、そうなんです。自分、このままじゃ入学できないんじゃないかと思ってるんですよ。」

スクール 「まあ、テロリスト集団に属しているって言ったたら大変だものね。でも、大丈夫よ。そう言うと思つて、企業は用意しておいたから。」

一夏 「えっ?! 本当ですか!!」

スクール 「ええ、本当よ。だから、安心して行ってちょうだい。」

一夏 「ありがとうございますー！」

スコール 「どういたしまして♪あつ、そうだ。貴方1人じゃ心配だからあと二人ほど連れて行ったらどう？」

そうだな、二人か。一人は決まっているが、あと一人か…。

そうだ！アイツにしようか、あんまり話したことないけど。

第5話

よお、俺だ織斑一夏だ。今、IS学園の前にいるんだが、思ってたよりでかいなこの学園。

「まあ、島一つ学園にしているからね、そりやでかいよ。」

一夏 「そりやそうか。」

「たく、なんで私がIS学園に入学しなければならないんだ。」

「もお、マドカちゃんたらそんなにカリカリしないの。」

マドカ 「うるさい！お前は能天気すぎるんだ！龍亜！」

一夏 「まあまあ、二人ともけんかはするな。」

と、俺が牽制する。

龍亜 「一夏がそう言うんだつたら喧嘩は止めるよ！」

マドカ 「うっ…、すまない。」

一夏 「よし、それじゃあ学園長の所に行こうか。」

・

学園長 「それではこれで入学の手続きは終わりです。」

一 龍 マ 『ありがとうございます。』

学園長 「3人のクラスは一年一組です。では、山田先生、彼らの案内をお願いします。」

山田 「はい、わかりました。それでは私についてきてください。」

・

山田 「ここが一年一組です。私はHRをしますので入ってきてくださいと聞こえたら入ってくださいね。」

と言い、教室に入っていた。

教室SIDE

山田 「はい、みなさんおはようございます。HRを始める前に今日は転校生が来ているので自己紹介してもらいましょう。では、入ってきてください。」

一龍 マ 『はい。』

俺を見た瞬間、掃除用具とクソ兄がびつくりしていた。

山田 「それでは、一番手前の人からお願います。」

龍亜 「おっ、私からか。皆さん！どうも、黒咲龍亜です！好きなものは、兄と寝ることです！3年間よろしくお願います！」

マドカ 「次は私か。黒咲マドカだ。好きなことは、トレーニング。よろしく頼む。」

一夏↓亮 「俺は黒咲亮。好きなことは機械の整備や開発、嫌いなものは女尊男卑の思想と自分ができたからと言ってそれを人に押し付ける思想だ。よろしく頼む。」

亮の自己紹介が終わったタイミングで何かを感じたので少し体をずらすと、亮の頭があった位置に出席簿があった。

亮 「いきなり何をするんだ、織斑教諭？」

千冬 「ふん、嘘の自己紹介をするからだ、一夏。」

亮 「俺は織斑一夏ではない。アンタのもう一人の弟は死んだんだろ？いいかげんに認めろ、」

と言い、俺は指定された自分の席に行った。

休憩時間

簪SIDE

なんであの人がここにいるの?!みんな気づいてないの?とりあえず、あの時間けなかつた事を聞かなきゃ。

END

それなりに授業は難しいと聞いていたが、思ったより簡単だったな。

こんななんだったら、スコール が作った問題の方が難しいわ。

簪 「あの、ちよつといい?」

亮 「うん?なんだ、更識簪。何か用か?」

簪 「放課後に屋上に来て欲しいの。空いてる?」

亮 「別に空いているが。」

簪 「じゃあ、その時に聞きたいことがあるからちやんと来てよね。」

亮 「ああ、わかった。」

と言い、簪は教室を出て行った。

第6話

放課後―

亮 「で、山田先生何の用ですか？」

俺たちは、今職員室にいた。

山田 「亮君たちに渡す物があるので呼んだんですよ。」

亮 「渡す物？何ですか？」

山田 「はい！これですよ。」

渡された物は、何かの鍵だった。

龍亜 「あのく、山田ちゃん？これ何なんですか？」

山田 「それは寮の鍵ですよ。今日から寮で生活してもらいますので。」

マドカ 「ん？寮での生活は四日後ではなかったのか？」

山田 「それが、貴重な男性操縦者ですので、早めにIS学園で生活させると、政府の方が。」

ああくね、女尊男卑の連中とか女権利団体とかに狙われるからか。そこの所は政府の奴らに感謝するか。

亮 「そうか、ではもう帰ってもいいか？この後に用事があるからな。」

山田 「そうですか、もういいですよ。」

こうして俺たちは職員室を後にした。

・
・
・
・
屋上

亮 「で、何の用だ？更識簪。」

簪 「貴方ってあの時襲撃して来たカイザーって奴でしょ？」

亮 「ほお、そう思った理由は？」

簪 「雰囲気よ、雰囲気がカイザーと同じだった。」

それだけで見破るとはな、やはり選んで正解だったか。

亮 「よくわかったな、俺がカイザーだ。で、話とは？」
そう言うと、簪は右手につけた時計を見せて来た。

簪 「これについて聞きたかったの。」

亮 「?!・・・やはり選ばれたか。」

簪 「どういう事？選ばれたってなに？」

亮 「それは四天の証〈紫毒〉、俺が開発した四機のISの内の一つだ。この機体達には、少し問題があつてな。」

簪 「？、問題？」

亮 「ああ、そのISは乗り手を選ぶんだ。だから、今までのれた奴はいなかった。」

簪 「そんな機体、私に渡してよかったの？」

亮 「ああ、お前はあの時の俺と同じ目をしていたからな。」

簪 「・・・。」

亮 「もう聞きたいことはないな。」

簪 「もうないわ、ありがとう。」

と言い、簪は屋上から去った。

簪が去ってから数分後に屋上に続くドアがいきなり開いて一番会いたくない奴が入って来た。

亮 「・・・。」

秋羅 「よお、出来損ない。久しぶりだな。」

亮 「誰かと勘違いしてないか？俺は貴様のことなど一切知らん。」

秋羅 「お前・・・！まあ、良い。そんな事よりもお前もISを動かせるんだってな。」

亮 「動かしてなかったら、ここにはいない。」

秋羅 「なら話は早い！お前、俺と戦え。」

亮 「断る。貴様はなにを言っている、俺には戦う理由などない。」

秋羅 「黙れっ！俺には理由があるんだよ！俺が勝ったらこの学園から出て行け!!」

亮 「だから何度言っても俺は「ちよつと待ってくれるかしら?」?!
アンタは・・・?!」

秋羅 「だれだよ?!お前は?!」

??? 「そんな事今はどうでもいいでしょ？それよりも黒咲君、この勝負受けてくれないかしら？」

亮 「…、アンタがそう言うなら受けよう。だが、ルールはこちらで決めさせてもらうぞ。その勝負の日はいつだ？」

秋羅 「三日後だ！精々恥をかかないようにな!!」

と言い、秋羅は屋上を後にした。

亮 「で、なんでアンタがここに居る、スコール。」

??? ↓スコール 「あら、黒咲君達が心配で来たのよ。感謝してよね。」

この時知ったのだが、オータムも来るらしい。

後、部屋の同室者は、俺がマドカと一緒に龍亜が本音という女の子と同じ部屋らしい。

決闘当日

屑SIDE

千冬 「秋羅、勝てるか？」

秋羅 「言うまでもないよ。あんな出来損ない相手に負けるはずないじゃないか。」

千冬 「そうか。だが油断はするなよ。」

END

黒咲SIDE

スコール 「で、貴方はあの時の機体で行くの？」

亮 「いや、あの機体で行ったらすぐに俺がカイザーだとバレてしまう。だから別の機体で行く。」

スコール 「あんなのがまだあるの？ちよつと貴方を敵に回したらやばかったわね。」

龍亜 「亮兄、頑張ってね！」

マドカ 「亮、勝てよ。」

亮 「わかつている、行くぞダーク・ガイア。」

・
・
・
・

俺が行くと、秋羅が待っていた。

秋羅 「遅かったな、この俺を待たせるなんて、?!なんだその機体は?!」

秋羅の目の前にいたのは、岩の鎧を纏った悪魔だった。

亮 「おい司会、早く始めろ。」

司会 「あっ、はい！それでは織斑秋羅対黒咲亮の試合を始めます

!!両者構えて、それでは始め!!」

こうして試合は始まった。だが、織斑秋羅は知らない。この戦いは、訓練のような生易しいものではないと

第7話 悪しき力で正義を掴め

秋羅 「シネエー!!出来損ない!!」

試合が始まったと同時に秋羅が斬りかかってきた。

亮 「馬鹿か、ふん!!」

俺は鎌を出して秋羅の剣を防いだ。

秋羅 「なんだよ!その武器?!」

亮 「旋風鎌—サイクロン・サイス—この機体の専用武装だ。」

そう言い、俺は少し挑発してみた。

亮 「お前、いくらなんでも弱すぎる。それで、よくクラス代表になれたな。」

秋羅 「言わせておけば...!!俺が負けるはずないんだよオーオー!!」

また秋羅が斬りかかってきた。

亮 「また同じことか...。」

次は、右手に炎を発生させて秋羅に向かって投げた。

秋羅 「う、うわあー!?!」

そして炎は秋羅に直撃した、かのように見えた。

炎は、秋羅にあたる直前に、彼の剣に斬られていた。

亮 (零落白夜か、面倒だな。)

秋羅 「そうだ!俺には千冬姉と同じ力があるんだ。お前はもう終わりだ!!ウオオー!?!」

亮 「なら、その武器を壊してやろう。碎け、旋風鎌。」

その瞬間、彼の鎌から風が巻き起こり、秋羅の武器に当たった。

バキィー!?!

秋羅 「はっ?お前!何をした?!」

秋羅は何が起こったかわからなかった。

亮 「なに、簡単だ。面倒だったからその武器を破壊させてもらった。これでお前には武器はない。」

秋羅 「あっ...、棄権しま『そんなことは認められないわよ。』なっ?!どうして?!」

スコール 「だって、彼が決めたルールの中には途中棄権は認められないっていうルールがあるからよ。

秋羅 「そんな…!!」

亮 「話は終わったか？なら、もう終わらせてやる。

秋羅 「ヒイッー!!助けてくれ!頼む!!」

亮 「なにを言っている。お前が吹っ掛けた決闘だろ？なら最後まで責任を持て。」

そう言い、俺は炎を纏った隕石を作り出した。

亮 「消え去れ、ダーク・カタストロフ。」

次の瞬間、隕石が割れ、秋羅に襲いかかった。

秋羅 「う、うわぁー!!」

秋羅は、機体が解除され、その場に倒れこんだ。

その体は、ところどころが焼けていた。

亮 「自分の無力さを思い知れ。」

そう言い、俺は戻って行った。

・

千冬 「なっ?!なんだあの機体は?!しかも、秋羅をダメージを受けずに倒すだ!!」

山田 「へえ、亮君って強いんですね。」

千冬 「あいつのIS、調べる必要があるそうだな。」

そう言い、千冬は亮の元に行った。

俺が戻っている時に

簪 「お疲れ様、全然余裕そうだったね。」

亮 「当然だ、あんな奴本気を出さなくても勝てる。」

簪 「ふうーん、そうだ!私も姉に決闘を挑むからみに来てくれる?」

亮 「見に行かせてもらおう。四天の力がどれほどのものか気になる

るからな。」

簪 「本当?!ありがとう。じゃあね。」
と言い、簪は戻って行った。

コラボ回 ―次元を越えて―

俺は今、織斑千冬に絡まれていた。

亮 「で、何の用だ。織斑教諭。」

千冬 「とぼけるな！何故あそこまでした！秋羅に戦う意思はもうなかっただろう!!それと、お前の機体だがカタログよりも高いスペックだ、だからこちらに渡せ。」

恐らく、俺の専用機を奪い、あの神童の立場を守るためだろうな。

亮 「決闘だからな、お前にどうこう言われる筋合いはない。それと、専用機のことだが、ちゃんと企業に許可は取ったんだろうな。」

千冬 「企業からは許可を取ってある、だから渡せ。」

亮 「嘘だな、それだったら俺のところ連絡が入っているはずだ。」

千冬 「黙れ!いいからさっさと渡せ!!」

そう言い、俺の専用機を無理矢理奪おうとして来た。

亮 「はあ、無駄だ。」

俺は腕を掴み、そのまま織斑千冬を投げ飛ばした。

千冬 「がああっ!!き、貴様っ!!」

亮 「それでも教師か?」

そう言い、俺はその場を後にした。

亮 「戻ったぞ。」

龍亜 「おかえり!亮兄、圧勝だったね!」

マドカ 「たく、お前ならもつと早く終わらせることができただろう?」

「

亮 「仕方ないだろ、気付かれないようにするためだ。後、山田先生に伝えてくれ、会社の用事で学校を明日から一週間ほど休むと。」

マドカ 「?わかった、伝えておこう。」

その日の夜、俺は屋上にいた。

亮 「後はこうして…、「どこに行くんだ?」…マドカか、どうした。」

マドカ 「亮、会社の用事って嘘だろ?本当は何をするんだ。」

亮 「…、マドカには教えておくか。これだ。」

そう言い、俺はあるガジェットを見せた。

マドカ 「何だこれは?」

亮 「これは亜空間転送装置、俺の計算が正しければ、これを使って異世界に行けるはずだ。」

マドカ 「正直に言ってくればいいものの、で本当に行くのか。」

亮 「当たり前だ、これが成功すればおれの目的に一步近づく。」

マドカ 「…、無茶するなよ。」

亮 「?止めないのか。」

マドカ 「お前は止めたとしても行くだろ?」

亮 「そうだな、そろそろ行ってくる。」

マドカ 「ああ、無事帰ってこいよ。」

亮 「わかってる。亜空間転送装置、起動!!」

そして俺は、一時的にだがこの世界から消えた。

・
・
・
・

そして…、

亮 「うっ、成功したのか?」

俺はいま路地裏にいた。だが、俺はここに来たことがあった。何故ならその場所は、秋羅によくいじめられた場所だったからだ。

亮 「なっ?! 失敗したのか! 何故!! 何故よりによってこの場所に… 誰かが戦っている?」

音のする方に向かうと、

亮 「なんだこれは…!」

目の前で赤と青の戦士と異形の者が戦っていた。

この出合いが後に重要になってくることを俺はまだ知らなかった。

コラボ回―次元を越えて―会合する戦士たち

???
SIDE

よお!!俺は梶田政弥! I S 学園に通う普通の学生だ。えっ、I S 学園に通ってるだけでも普通じゃないって? そんなこと気にするな!

そして、俺にはもう一つの姿がある。それは、この街を密かに守る正義のヒーロー、仮面ライダービルドだ!!

と紹介していると、スマッシュユが攻撃して来た。

政弥 「おっと、危ないなあ。さてと、そろそろ終わらせるか、勝利の法則は決まった!!」

そして俺はベルトの横にあるレバーを回した。

Ready Go!!

音声が鳴ったと同時に何処からかグラフが出て来て、スマッシュユを挟み込んだ。

スマッシュユは逃げ出そうと体を動かすが、グラフがガツチリと挟み込み、逃げ出せない。

ボルテック・フィニッシュ!!

俺はグラフに沿ってキックを放った。途中の地点で速度を上げ、スマッシュユに突っ込んでいった。

スマッシュユは爆発して倒れ込んでいた。

俺は、そのスマッシュユに向けてエンパイボトルを向けると、ボトルがスマッシュユの成分を吸収していった。ボトルは先程より膨らみ、蜘蛛の巣のような模様がついていた。

政弥 「さてと、スマッシュユも倒したし、帰りますか。」

帰ろうとした時、爆発音が聞こえた。

政弥 「?!まさか、まだスマッシュユが: : !!」

爆発が起こった方向に向かおうとした時、壁を突き破ってスマッシュユが飛ばされて来た。

政弥 「なっ?!スマッシュユが?! 一体誰が: : !!」

壊れた壁の向こうに視線を向けると、そこにいたのは、黒い竜を模した全身装甲を纏ったナニカがいた。

??? ↓政弥SIDE END

亮SIDE

どうやら異世界に行くことは成功したようだ。その証拠に、俺の世界にはいない生物やIS?があるからな。

ふと後ろに気配を感じ、横に転がって避けると、俺がいた場所で炎が燃えていた。

亮 「危ないところだった、もう少しで焼かれるところだった。この生物も、アイツが戦っていたものと同じだろな。形は違うが。」
と言い、俺は腕時計を上に掲げて装甲を展開した。

亮 「さあ、久しぶりに使うとするか、来い！サイバー・ダーク!!」
鎧獄竜 『アア、久シブリノ戦闘ダ!!行クゾ、マスター!!』

謎の怪物は、俺に向かって炎を連射してきたが、俺はそれを片手で弾いていた。

亮 (この怪物の主な攻撃方法は、火球による攻撃か…。だが!!)
ガァーン!!

謎の怪物 『??!!』

亮 「近づかれては意味がない。」
そのまま、俺は怪物を殴り飛ばした。そして、壁を突き破っていつ

た。
この時、俺は気付いていなかった。その壁の向こうにあの青と赤の戦士がいたことに。

亮SIDE END

第三者視点

政弥 「なっ?!スマッシュ同士が何で…!!」

亮 「ほう?この怪物の名はスマッシュと言うのか。名前がわからなくて困っていたところだ。後、俺はスマッシュじゃない。」

政弥 「お前は一体何者なん」ところでこのスマッシュはどうしたらいい?」ああ、成分を回収し元の人間に戻すんだよ。」

と言い、政弥は倒れているスマッシュに向かってエンブレイトル

を向けた。すると、スマッシュの成分がボトルに吸収されていき、そのボトルは、先程より膨らみ、蜘蛛の巣のような模様がついているものに変わっていた。

政弥 「さてと、成分の回収も終わったし、お前が何者かを教えてくれるかな？」

亮 「その前にお前から何者かを教えてくれないか。」

政弥 「わかった、俺は梶田政弥。IS学園に通う普通の学生だ。宜しくな！」

亮 「ふむ、この世界にもIS学園があるんだな……。」

政弥 「ん？なんか言ったか？」

亮 「いや、なんでもない。次は俺か、俺は黒咲亮、ただの旅人だ。」

政弥 「いやいや、旅人って、嘘もほどほどにしてくれよ。」

亮 「いや、その前に本当のことを教えても信じないだろう？」

政弥 「信じてやるよ。」

亮 「はあ、仕方ないか。ならこの事は、誰にも言うなよ。じゃあ改めて、俺の名前は黒咲亮、別のIS学園から来た者だ。」

コラボ回―世界が違ふところも違ふ―

政弥 「はっ？別のIS学園？どう言う事？」

亮 「簡単に説明すれば、俺はこの世界にあるIS学園ではなく、別の世界のIS学園から来たと言うわけだ。」

政弥 「はあ…、にわかには信じがたいが。」

亮 「うん？信じるんじゃないかったのか。それを約束して話したんだが。」

政弥 「いや、悪りい。ビックリしてたからつい。」

亮 「そうか、それもそうか。ところで、さっきIS学園の生徒って言ったよな。と言うことはこの世界にもIS学園があると言うことだな。」

政弥 「おう、あるぞ。なんなら来るか？」

亮 「ああ、行かせてもらおう。」

こうして俺はIS学園に行く事にした。

政弥 「アイツの顔ってどこかで見た事があるんだけどなあ。どこだっけ？まあ、いいか。」

移動中

政弥 「よし、着いたぞ。」

亮 「ありがとう、だが俺もIS学園の場所知ってるから案内は必要なかったが。」

政弥 「ひどいな、お前…。というか何で仮面なんか付けてるんだ？」

亮 「いや、面倒くさいことになるかもしれないからだ。」

政弥 「？.そうか。」

すると、誰かがこっちに向かって走って来た。

??? 「あつ！お兄ちゃん、おかえり。その人は？」

政弥 「よっ！今帰ったぜ。あと、此奴は黒咲亮。俺の新しい友達だ。」

亮 「どうも、黒咲亮だ。よろしく頼む。」

??? 「はじめまして、私は梶田結愛。よろしくね、黒咲さん。」

政弥 「さあ！自己紹介も終わったし、そろそろ行きますか。」

移動中

亮 「すまない、喉が渴いたから飲み物を買ってくる。」

政弥 「おう、いつてらー！」

この時俺は一つのことを忘れていた。IS学園があるということ
はあの人もいるということ。

亮 「さてと、何にするか。「うん？見ない顔がいるな。」…、お前は…！」

顔を横に向けると、自分が一番嫌いな人物が立っていた。

亮 「織斑…、千冬…！」

千冬 「私が織斑千冬だが？それと見ないか顔だが、お前は誰だ？」

亮 「…俺は黒咲亮、政弥の友だ。」

千冬 「そうか、IS学園にようこそ。よろしく頼む。」

千冬が手を出して来て、握手を求めてきた。

亮 「?!あ、ああ、よろしく頼む。」

(コイツ、本当に織斑千冬か?!俺の世界とは全く違うぞ!!)

俺は内心、凄くビククリしていた。

亮 「俺は友達を待たせてるから、これで。」
千冬 「ああ、時間を取らせて悪かったな。」
こうして、俺はその場を後にした。

亮 「すまない、待たせたな。」

政弥 「おう、遅かったな。どうかしたのか？」

亮 「ああ、少し予想外なことがあっただけさ。」

政弥 「？予想外なこと？何があったんだ？」

亮 「いや、また後で話す。」

(まさか世界が違うだけでこうも違うとはな、アイツがいたということとは、この世界には……、いや、考えすぎか。)

この時、俺はこの考えが当たるとは思ってもいなかった。

コラボ回―次元を超えて―ついに会合、白と黒

元の世界S I D E

とある研究所

パソコンの前で一人の女性が泣いていた。

??? 「いっくん…、本当に死んじゃったの?」

この女性は、篠ノ之束。ISの生みの親である天災だ。

クロエ 「束様…、大丈夫ですか?」

??? ↓束 「うん…、大丈夫だよ、クーちゃん。」

クロエ 「あの、束様。織斑一夏とはどんな人何ですか?」

束 「そういえばクーちゃんは知らなかったね。いいよ、教えてあげる。その写真に写ってる男の子がいっくんだよ。いっくんは、私を一人の人として見てくれたし、ISの本来の目的である宇宙開発の為の物だと理解してくれた子なんだ。」

クロエ 「そうなんですか…。」

束 「でも、あの大会の時に…、いっくんはいなくなっちゃったんだ。」

クロエ 「…………。」

束 「ごめんね!こんな辛気臭い話をしちゃって。私もいつまでも落ち込んでる場合じゃないよね。」

そう言い、束はパソコンをいじり始めた。

クロエは、その後ろ姿を見ることしか出来なかった。
すると、突然

ガタンツ!!!

クロエ 「?!どうしたのですか?」

束が急に立ち上がり、パソコンの画面を凝視していた。

束 「嘘…、まさか、生きてたの…?… いっくん。」

元の世界S I D E E N D

コラボ世界S I D E

政弥 「ここがこうで、ここがこうなって。」

今俺は、政弥に学園を案内してもらっているが、特に変わったところはないな。

??? 「おーい！政弥！」

政弥 「げっ、嫌な奴が来たな。」

??? 「おいおい、そんな事言うなよ、友達だろ、俺たち。」

政弥 「いや、友達ではないし。紹介してなかったな、コイツは織斑

一夏、あの織斑千冬の弟だ。」

亮 「お前がこの世界の織斑一夏か。」

一夏 「おう、そうだが、今なんか言ったか？」

亮 「いや、なんでもない。それより、お前の隣にいる女子は誰だ？」

箒 「私は篠ノ之箒、一夏の幼馴染だ!!」

なるほど、どうやらこの世界では俺は箒と千冬とは仲が良いらしいな、なんかおかしな感じがするが。

亮 「そうか、俺は黒咲亮だ。よろしく頼む。」

そう言い、俺は手を出した。さあ、どう出る？

一夏 「おう！よろしくな。亮!!」

織斑が、手を握ってきた。ふむ、人付き合いはいい方か。

織斑につられ、

箒 「私もよろしく頼む。」

と手を出してきた。

俺はその手を

亮 「ああ、よろしく頼む。この世界のお前とは仲良くできそう
だ。」

握り返した。

箒 「?どういう意味だ。訳がわからないぞ。」

亮 「いや、後でわかるさ。ところで織斑。」

一夏 「お?なんだ。」

亮 「あつて早々悪いんだが、俺と戦ってくれ。」

コラボ回―次元を超えて―戦闘！黒と白！！

一夏 「えっ？もう一回言ってくれないか。」

亮 「もう一回言うぞ、織斑一夏、俺と戦ってくれ。」

一夏 「戦うって言ってもなにで「勿論、ISでだ。」えっ、でもお前IS乗れないだろ。」

亮 「ISに乗れるし、専用機も持ってる。問題ない。」

一夏 「でも、そんな事急に言われても、「話は聞かせてもらったぞ。」千、織斑先生いたんですか。」

千冬 「なにやら面白そうな話をしていたからな、ところで黒咲亮と言ったか。」

亮 「なんだ？」

千冬 「ISの適正があるのに何故IS学園に入学してないんだ。それと、全国でISの適正検査をおこなったが、3人目がいたなんて聞いてないぞ。」

亮 「今教えるわけにはいかないんだが…、ならばこういうのはどうだ？俺が織斑に負けたら俺について教えてやる。」

千冬 「ほう、その言葉に嘘はないな？」

亮 「ああ、嘘はない。」

千冬 「そうか、一夏この勝負うけてやれ。私がアリーナの使用許可をもらってくる。」

一夏 「千冬姉がいうなら、スカーリーン!!! 痛っ?!」

千冬 「織斑先生だと言っているだろう。」

織斑の頭を出席簿で叩き、どこかに行ってしまった。

というか、あの出席簿、鋼鉄か何かでできているのか。音が尋常じゃなかったぞ。

亮 「それでは、アリーナで待っているぞ。織斑一夏。」

俺はアリーナに向かった。

アリーナSIDE

俺は専用機、白式を纏ってアリーナに出ると黒咲が待っていた。

亮 「やっと来たか、待ちくたびれたぞ。」

一夏 「待たせて悪かったな、でも俺が勝たせてもらうぜ！俺もお前が何者か知りたいからな！」

亮 「フツ、まあ頑張れ。」

そう言い、俺は腕を上にあげた。

亮 「行くぞ、織斑一夏！こい！サイバードーク！」

彼が叫んだ瞬間、装甲が展開され彼に装着された。

一夏 「なんか強そうな機体だな、それじゃあ、行くぜ！」

織斑も雪片式型を構え、亮に突っ込んでいった。

観客席SIDE

千冬 「三人目の男性操縦者なのに未知の全身装甲のISとは、本当にアイツは何者なのだ。政弥、わかるか？」

政弥 「いや、俺でも分かりませんよ。」

千冬 「だが、何か既視感があるな……。何故だ？」

観客席 SIDE END

俺は、織斑が突っ込んできたので、迎撃する準備をしていた。

一夏 「何かするつもりだが、その前に倒す!!」

と言いつつ、突っ込んでいったが、途中で止まり、驚いていた。

一夏 「おい、まさかそれで戦うつもりじゃないだろうな。」

亮の手にあったのは、赤い色をした刀身がついた短剣だった。

手だけではなく、腰にもセットされていた。

亮 「ああ、その通りだ。少し小手調べというわけだ。不満でもあるか？」

一夏 「いや！不満なんてないぜ！それを使ったのが負けた理由にするなよ！」

再び一夏は、動き始めた。

亮 「理由にはしないさ、セイツ!!」

俺は持っていた短剣を5本程上に投げ、拳で打ち出した。

一夏 「えっ?!ちよ、ガッ!!」一発当たっちゃったか…!」

織斑は、咄嗟に躲したが一発だけ当たってしまった。

亮 「まだまだあるぞ、避けきれるか？」

一夏 「ああ！避けきって見せるさー！」

亮はまた短剣を打ち始めたが、

亮 （何故だ？さっきから当たらなくなってる…、まさか対応していると言うのか、面白い!!」

突然、亮が打ち出すのをやめた。

一夏 「どうした？もう終わりか。」

亮 「ふん！いい気になるなよ。」

亮は手を前に出し、掌を広げた。その瞬間、彼の手のなかには長剣があった。その剣は、先程投げていた短剣を大きくしたものだだった。

亮 「行くぞ、織斑一夏。少し本気を出してやる。」

次の瞬間、彼の姿が消えた。

一夏 「なっ?!ぐっ!!」

消えた瞬間に織斑をものすごい衝撃が襲った。

亮 「どうした？これで終わりではないぞ。」

亮は、長剣を空中に固定した。その瞬間、彼の周りを赤い電気が迸った。

一夏 「まさか…！それも打ち出すのか?!」

亮 「その通りだ、楽しめたぞ、織斑一夏。これで、終わりだ!!」

亮は、先程よりも強い力で剣を打ち出した。打ち出した剣は、雷を纏って一夏に向かっていった。

一夏 「……………」

一夏は、それを焦る事なく見ていた。そして、その剣は、一夏に直撃した。

亮 「まだだ!!」

亮は走り、織斑に当たった剣の柄を殴った。
その瞬間、爆発が発生した。

コラボ回―次元を超えて―決着

砂煙が晴れ、そこに立っていたのは黒咲だった。

箒 「一夏！一夏はどこだ!？」

箒は一夏が居なくなつて、一夏を探していた。そして、

箒 「一夏、一夏ああああ!!」

織斑は、黒咲からかなり離れたところに倒れていた。壁にぶつかったのか、織斑が倒れている前にある壁には放射状のヒビが入っていた。

亮 「死んではない、まだ生きている。だが、グウツ！」

突然、彼は地面に膝をついた。

亮 「はあ、はあ、まさかあのタイミングで、反撃して来るとは。」

亮の右肩には大きな亀裂が入っていた。どうやら、さっきの一撃の時に零落白夜で切られたみたいだ。

亮 「はあ、はあ、ここまで追い込まれたのはアイツ以来だな。」

そう言い、倒れている一夏に近寄っていき、一夏を教員の元に連れて行つた。

・
・
・
・
・

一夏 「…… はっ?!勝負は！痛っ!!」

亮 「目、覚ましたか？勝負は俺の勝ちだ。」

一夏 「そうか……俺、負けたのか……なあ、あんた本当に何者なんだ?」

沈黙が続いていたが、織斑が話しかけてきた。

亮 「はあ……まあ、俺に一撃与えることができたんだ、特別におしえつやる。だが、今聞き耳を立てている奴も含めてな。」

ガタンツツ!という音がドアの方から聞こえ、少し間を空けてからドアが開いた。

一夏 「千冬姉、箒…。」

千冬 「むう、盗み聞きしてすまん。それよりももう大丈夫なのか？篠ノ之がもの凄く心配してたぞ。」

箒 「一夏!!大丈夫なのか?!

一夏 「ああ、大丈夫だ。心配かけてごめん。」

亮 「まだいるだろう？出てこいよ、政弥。」

政弥 「なんだ、気づいていたのか。」

政弥が笑いながら保健室に入ってきた。

一夏 「俺の見舞いに来てくれたのか政弥、ありがとな。」

政弥 「いや、そんな訳ないだろ。」

一夏 「そこまで言う必要ないだろ、後、心配してくれてもいいじゃないか。」

亮 「すまんが、もう話していいか？待たされるのはあんまり好きじゃないんだが。」

と俺が言い、話を終わらせた。

亮 「それじゃ俺が何者なのか教えてやるよ。と、その前にコレは邪魔だな。」

俺は仮面を外し、机の上に置き、皆んなのほうを向いた。

千冬 「なっ?!おまえのその顔は…?!」

千冬は亮の顔を見て驚いていた。

箒 「嘘だろ、なんで、一夏はここにいるぞ?!」

政弥 「何処かで見ただ事があると思っていたが、お前の顔は…?!」

仮面を外した亮の顔は、今ベッドにいる織斑一夏と同じ顔だった。

一夏 「俺が…、もう一人…?!」

亮 「政弥には自己紹介していたが、改めて自己紹介させてもらう。俺の名前は、黒咲亮。平行世界の織斑一夏だ。」

コラボ回 最終―次元を超えて―

保健室は、人が居るのものにもの凄く静かだった。

千冬 「別世界の…、一夏だと…?!」

千冬は驚きの事実に驚きを隠せなかった。

亮 「そうだ、俺は別世界の織斑一夏だ。信じれないなら、何か証拠を見せようか？」

千冬 「いや、見せなくてもいい。それよりも、そっちの私はお前とはどんな感じなんだ？」

箒 「わ、私もどうか知りたい！どうなんだ？」

亮 「……………」

俺は質問された瞬間、険しい表情になり、黙ってしまった。

千冬 「い、言いたく無いなら言わなくてもいい。すまなかったな。」

箒 「わ、私も……………」

一夏 「お前、本当に俺なんだよな？」

亮 「そうだと申しただろう、なんならお前の誕生日、血液型、好きな事、嫌いな事、言ってみようか？」

一夏 「いや、それ聞いただけで俺ってことがわかったわ。」

俺が質問責めに合っていると、

政弥 「それよりも、なんでこの世界に来たんだ？」

亮 「それはだな、これが実際に起動するか実験したかったからだ。」

そう言い、俺は上着のポケットから手のひらサイズの機械を取り出した。

政弥 「これは？」

亮 「これは亜空間転送装置、物や人を別の世界に転送させる装置だ。」

政弥 「えっ、お前らの世界だとこんな物普通に作れるのか？」

亮 「いや、これを作れるのは俺ともう一人の天災ぐらいだ。」

俺は少し、自慢気に言った。

亮 「きてと、少し長居すぎたか。」

俺は椅子から立ち上がり、出口に向かった。

政弥 「もう帰るのか？まだ聞きたいことがいっぱいあるんだが。」

亮 「まあ、待たせてる奴がいるんでな。後、政弥。」

俺はポケットからボトルを取り出し、政弥に向かって投げた。

政弥 「おっと！なんだ…、これは?!なんでお前がボトルを持って
いるんだ?!」

亮 「さあな、気づいたらポケットに入ってた。俺が持っていても
意味がないだろうかと思つてな。じゃ。」

そう言い、俺は保健室を後にした。

・
・
・
・

俺は今、アリーナの中央に居た。

亮 「よし、後は起動するだけだな。後、」

俺は後ろに振り向いて、

亮 「おい、いるんだろう？箒。」

そう言うと、物陰から箒が出て来た。

箒 「さ、最後までいい見送りしようと思つて来たんだが、駄目か？」

亮 「別に構わない。」

そこから無言の状態が続いたが、箒が、

箒 「最後にひとつだけ聞いていいか？」

と聞いて来た。

亮 「なんだ？手短かに済ませろ。」

箒 「向こうの私とは、仲良くしているのか？」

聞かれた瞬間、俺は黙ってしまったが、

亮 「ごつちの世界みたいだったらいいなとは思ったとだけ言っておく。」

箒 「えっ、それはどういうことだ...?」

亮 「さあな、後は自分で考えな。今度こそさよならだ。じゃあな、箒。」

俺は装置を起動し、箒の目の前から姿を消した。

箒 「一体、どういう意味なんだ...。」

箒は一人で考えていた。

INFINITE BUILDER コラボ エンド